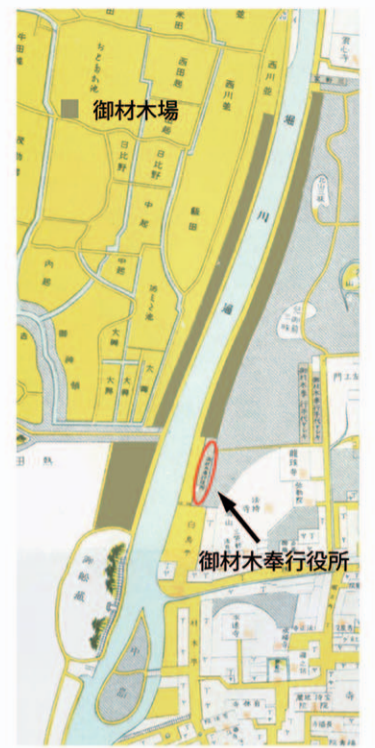




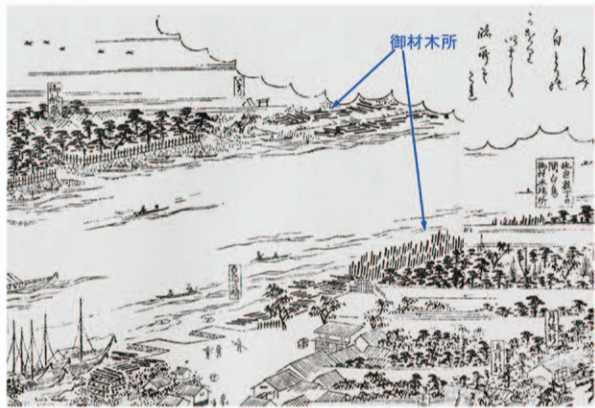
元和元年（1615）に木曾山が尾張藩領に加増され、良質な木材が運び込まれるようになった。白鳥がその集積場で、寛永6年（1629）には御材木奉行もおかれて本格的に流通し始め、余剰材は商人に払い下げられ、堀川を遡って城下へと運ばれた。元材木町など堀川東岸の地域は材木商の町で、その繁栄を支えたのは堀川である。

木曾からの輸送は筏流しである。木曾では雪解けとともに伐採を始めて、台風シーズンが終わり洪水の心配がなくなる9月頃から谷の流水を利用して材木を木曾川の合流点に集める。年末から木曾川本流を管流くだながしと呼ぶ一本ずつばらばらの状態で流し、錦織にしこおり（現：八百津町）で筏に組み、筏川や鍋田川を下り伊勢湾を横断して熱田へ出て、当時は堀川の河口近くであった白鳥の材木場（貯木場）へと運ばれた。

一年間の平均搬入量が、160万本であったとの記録もあり膨大な木材が木曾からはるばる運ばれてきていた。「人のちからおそろしい哉木場の月」という俳句が詠まれている。



熱田神領字入図 元文元年(1804)



御材木所（尾張名所図会 部分）



白鳥河岸（名区小景）



天王崎をゆく筏（桜見与春之日置）

明治になって尾張藩有林は官有林に組み込まれ、22年からは御料林（皇室財産）となったが、それまでと同様に筏輸送により白鳥貯木場へ運ばれていた。入荷量の増加と将来は筏から鉄道輸送へ変わることを想定して、明治40年に隣接の土地17,600坪（5.8ha）を買収している。

木曾御料林の木材は明治44年の中央線開通により鉄道輸送が始まった。大正5年には臨港線の支線で白鳥貯木場と名古屋駅を結ぶ白鳥線が完成し、木材専用の白鳥駅が営業を開始した。開設に合わせて、貨車から降ろした木材を貯木し筏に編成する白鳥駅貯木場が、鉄道省により駅に隣接して設けられている。翌年から白鳥貯木場の大改修が始まった。白鳥駅から貯木池への引き込み線が引かれ、貯木池も改修されて、10年に拡張事業が完成している。46,900坪（15.5ha）という広大な貯木場で、12年には水上移動式クレーンを設置して揚陸作業の効率化も行っている。



武平町（現・東区泉1）にあった帝室林野管理局名古屋支庁（愛知県写真帖 明治43年）

江戸時代初期から300年にわたって行われてきた木曾山からの筏輸送は、大正12年を最後に廃止された。民間材の筏輸送（貯木は他の貯木場）も大正15年で終了している。

一方、飛騨の木材は御料林・民間材とも、少し遅れて昭和8年を最後として高山線による輸送に変わっている。

なお、木曾山は昭和22年に皇室財産から国有林に変わり林野庁の管理となった。戦後もこの地域の中核貯木場として多くの木材が貯木池に浮かぶ姿が見られたが、木材産業の衰退とともに利用が減っていった。昭和54年に貯木場の一部が名古屋市へ売却され、57年には白鳥駅の廃止、平成元年には世界デザイン博の会場となり、現在は国際会議場、白鳥庭園・公園、名古屋学院大学などに姿を変えている。また、熱田白鳥の歴史館が設けられ、この地方の木材産業発祥の地である白鳥の歴史を伝えている。